

中学校体育「剣道」授業における 「打突の機会」学習のための授業実践研究

中川正明*・池川茂樹**・直原 幹**

(平成29年3月6日受付；平成29年5月9日受理)

要 旨

本研究では「打突の機会」の特性に着目した指導方法について試案し、中学校一年生を対象に授業実践を行った。打突の機会（：出頭の面）の教材化は、短時間で学習課題の理解と学習が可能な「カウント練習」を工夫した。学習者の上達の程度は、授業前後に記録した動画から本研究で定めた技能評価基準に従って評価した。指導内容の効果は、剣道を専門的に経験した保健体育教諭および剣道を専門的に経験したことがない保健体育教諭が実施した授業の場合で比較した。その結果、授業者の剣道経験の有無に関わらず授業前後に生徒の技能に向上が認められ、「カウント練習」が打突の機会の指導方法として有効であることを示唆する結果が得られた。

KEY WORDS

中学校体育 Junior high school physical education 剣道 Kendo 打突の機会 Opportunities for striking

1 はじめに

平成20年に告知された中学校学習指導要領により、教科「保健体育」においては男女ともに武道が必修として実施されている⁽¹⁾。一方、平成24年度より武道の必修化が完全実施された以降も、学校教育現場では解決しなければならない課題が数多く指摘されている⁽²⁾。例えば、武道学習を行うための場所の確保、用具を揃える必要性や、指導者の不足、そして何よりも、武道を専門的に経験したことがない教員に対する指導法や指導内容の検討といった点である^(2,3)。

特に、剣道の場合は、他の種目と比べて竹刀や防具を身に着けて行う点が特殊であり、用具の着脱や竹刀操作の技術の習熟に時間がかかる。また、学習者が剣道の試合面での攻防を楽しむためには、攻防に必要な技能に習熟しなければならない。このような点から、剣道学習を限られた時数内で実施するためには学習指導上の課題提示で工夫しなければならない点が多い。このようなことを背景として、剣道を専門としない教員でも指導可能なカリキュラムや、限られた時間の中で武道の特性に触れ、効率的に基本動作を習得することのできる指導方法の検討は今後も必要といえる⁽³⁻⁵⁾。

剣道における対人的な技能の習熟を、効果的に進めるコツを示したものに「教え」がある。「教え」は、剣道の様々な場面における対応方法を学習者に伝承する目的で整理された学習上の着眼点ともいえる。このような剣道の「教え」の中で、「いつ」「どのような状況で」技を出すことが良いのかという「打突の機会」に関する「教え」として、「3つの許さぬところ」がある。これは、攻撃の成功率が最も高い「打突の機会」を整理したものであり、「起こり頭（相手が打とうとする動作や気持ちの起こり）」・「居ついたところ（こちらの打突を防御したところ）」・「尽きたところ（相手が打ち終わったところ）」といった機会を強調した「教え」である。このような剣道の「教え」を授業において教材化することは、剣道を専門としない教員の場合であっても、限られた時間の中で武道の特性に触れ、効率的に基本動作を習得することができるような授業を実施する上での一助になると考えられる。しかし、剣道の攻防を合理的に行なうために伝統的に継承されてきた「教え」を教材化した授業実践の試みは数少ない^(6,7)。

本研究では、伝統的に継承されてきた「教え」の指導内容を教材化することが剣道の伝統的な特性を活かした技能学習に貢献できるのではないかと考えた。そのため、剣道における「打突の機会」である「3つの許さぬところ：起こり頭（相手が打とうとする動作や気持ちの起こり）」を教材化した「カウント練習」⁽⁸⁾による段階的な授業実践を行い、「教え」の指導内容を「カウント練習」によって教材化することの有効性について技能の習熟度の面から検討した。

2 研究方法

2.1 学習者

授業は、新潟県J市中学校と長野県N市中学校において、剣道未経験の中学校1年生を対象に実施した。学習者は事前の学習で「素振り」、「送り足」および「踏み込み動作（踏み込み足）」の指導はなされた段階であった。新潟県J市中学校は、男子11名・女子3名の計14名のクラスであった。長野県N市中学校グループは、男子5名・女子8名の計13名のクラスであった。

2.2 授業実践における授業者

授業は、剣道を専門的に教えられる能力をもった保健体育教諭（剣道歴：34年，教職経験22年）および剣道を専門的に経験したことがない保健体育教諭（教職経験13年）が行う場合で実施した。授業実践の名称は、それぞれ「剣道専門者の実施した授業」および「剣道非専門者の実施した授業」とした。

2.3 授業内容

1 単元名 武道（剣道）

2 本時の指導（5/13）扱い

- (1) めあて：お互いの攻防の中から「打突の機会」を見つけて打突につなげることができる。
- (2) 展開の視点（主眼）：打突の機会をつかむことができない生徒が、簡易竹刀を用いたカウント練習を行う活動を通して、打突のタイミングがわかり、打突の機会を意識した打突ができるようになる。

3 展 開

表1 本授業実践における学習指導案

時	学習内容・活動	教師の支援（※）	技能評価と教具（◆）
5分	○準備運動 ○整列，集合，挨拶 ○本時における学習内容の説明	※竹刀を使った準備運動を行わせる。 ※前時の「踏み込み足」について想起させ、「打突の機会」について考えさせる。	
5分	○気当たり 1. 相手の体に触れる ・カウントを使って前進後退を行う	※2人1組で右手同士，手のひらを合わせ互いに押したり，引いたりさせる。 ※相手の力を感じたり，力を受け止めたりさせる。 ※1・2・33のカウントで前進後退を行わせる。	◆手で押すのではなく足と腰を中心に移動ができる。
20分	2. 簡易竹刀を使って「カウント練習」を行う ①4のカウントから打突する ②簡易竹刀での出頭競争をする	※簡易竹刀を使って相手の間合い（距離を変えずに前進後退をさせる）。 ※①前進（攻め）→②後退→③前進（攻め）の後，④で相手が出てくるところを打つようにさせる。 ※カウントを入れずに自分なりのタイミングで面を打たせる。	◆一定の間合いを保ちカウントを取りながら前進後退ができる。 ◆相手が前に出るところを打突できる。 ◆お互いの攻め合いから出頭面を打つことができる。
	3. 竹刀を使ってタイミング練習	※カウントを入れずに自分なりのタイミングで面を打たせる。 ※間合いの近いところから徐々に遠くさせて練習させる。 ※竹刀の振りが大きくなりすぎないようにさせる。	◆お互いの攻め合いから出頭面を打つことができる。 ◆1拍子のタイミングで打突することができる。
10分	4. 面の試合 ・1分間の試合，本数無制限	※4人1組。2人が試合，2人が審判となり面のみの試合をさせる。 ※審判は相手が出てくるところを打っている場合に手を挙げるようにさせる。	◆積極的に前に出て打突しようとしている。
5分	5. 小手と面，面と胴のタイミング練習	※小手の場合，間合いを近くすること。胴は斜め横に打つのでタイミングが遅れることを考えさせながら練習させる。	◆相手とのかけひきから打つ機会をとらえて打とうとしている。
5分	○本時の授業を振り返る	※打突の機会のポイントをまとめる。 ※本時のまとめと次時の確認。	

授業は50分授業で実施した。学習の主たるねらいは、「打突の機会：起こり頭（相手が打とうとする動作や気持ちの起こり）」を意識した打突の習得とした。表1は、本授業で用いた学習指導案を示したものである。活動内容は、各授業とも本研究で作成した学習指導案に従い「手を合わせて押し合う」、「『簡易竹刀』による『カウント練習』」、「竹刀を用いての打突」、「面の試合」および「小手と面と胴のタイミング練習」までとした。授業後、生徒には自己評価による技能評価および自由記述による練習内容に対する感想を依頼した。

授業で使用した「簡易竹刀」は、パイプカバー用の塩化ビニル管を用いて作成した（長さ1m、直径35mm）。パイプカバー用の塩化ビニル管は、外側が塩化ビニルで覆われているが、内側は弾力のあるスポンジであるが折れにくく軽い構造になっている。本研究では、初心者段階では簡易的な軽く短い竹刀を用いて間合いを近くすることにより、素早い踏み込み動作の上達や打突時の体勢保持が容易になると考えた。

「カウント練習」は、両者が同調して前進後退を繰り返し、打突者が1：前進（攻め）→2：後退→3：前進（攻め）の後、「4」のタイミングで対峙者が前進してくるところを3の位置から打つようにさせる練習方法をとった。

2.4 技能評価

剣道学習における打突の機会の学習成果については、授業前後に生徒の打突動作をビデオカメラにより側方より撮影した。撮影時の生徒の動作課題は、「打突の機会：起こり頭（相手が打とうとする動作や気持ちの起こり）」を意識した打突とした。また、試合練習における攻防の様相も録画した。

技能評価は、参観者3名（剣道経験：33～40年）により実施した。表2は、本研究で用いた技能評価基準を示したものである。技能評価基準は6項目を設定し、録画記録された試技を評価した。評価は「できている」を4点、「おおむねできている」を3点、「あまりできていない」を2点、「できていない」を1点とする4段階評価により実施した。3名の評価で2段階以上の違いが生じた場合は、再度動画を確認しながら話し合いにより決定した。

2.5 統計処理

本研究における授業後の技能上達の比較は、二要因混合計画の分散分析により検討した。第一の要因は、授業者の剣道専門性の有無であり、剣道専門者の実施した授業および剣道非専門者の実施した授業の2水準とした。また、第二の要因は学習者における打突動作の撮影時期であり、授業前および授業後の2水準とした。有意水準は5%未満とした。

表2 技能評価基準

1. 腕だけでなく足と腰を中心に移動ができる。
2. 相手が前に出ようとするところを打突できる。
3. お互いの攻め合いから出頭面を打つことができる。
4. 一拍子のタイミングで踏み込みを使って打突することができる。
5. 積極的に前に出て打突しようとしている。
6. 試合の際に相手とのかけひきから打つ機会をとらえて打とうとしている。（面以外の技）

得点 4：できている 3：おおむねできている 2：あまりできていない 1：できていない

3 結果

3.1 「打突の機会」の技能評価

3.1.1 技能評価の合計得点

表3は、各授業の学習者における技能評価の合計得点および技能評価の項目別得点を授業前後でそれぞれ示したものである。

技能評価の合計得点についての分散分析の結果、測定時期の主効果は有意であった ($F_{(1,25)} = 174.28, p < .01$)。剣道専門者の実施した授業は、技能評価の合計得点の平均値が授業前では 14.9 ± 2.39 点であったのに対し、授業後では 19.0 ± 2.39 点へと有意に高くなった。剣道非専門者の実施した授業の場合も、技能評価の合計得点の平均値が授業前では 13.9 ± 3.12 点であったのに対し、授業後では 17.3 ± 3.36 点へと有意に高くなった。すなわち、学習者の技能評価の合計得点は二つの授業ともに授業前後で高くなったという結果であった。

3.1.2 「腕だけでなく足と腰を中心に移動ができる」

分散分析の結果、測定時期の主効果は有意であった ($F_{(1,25)}=36.49$, $p<.01$)。剣道専門者の実施した授業は、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.71 ± 0.59 点であったのに対し、授業後では 3.36 ± 0.48 点へと有意に高くなった。剣道非専門者の実施した授業の場合も、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.38 ± 0.49 点であったのに対し、授業後では 2.92 ± 0.62 点へと有意に高くなった。すなわち、学習者の技能評価「腕だけでなく足と腰を中心に移動ができる」の得点は二つの授業ともに授業前後で高くなったという結果であった。

3.1.3 「相手が前に出ようとするところを打突できる」

分散分析の結果、測定時期の主効果は有意であった ($F_{(1,25)}=27.0$, $p<.01$)。剣道専門者の実施した授業は、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.71 ± 0.70 点であったのに対し、授業後では 3.21 ± 0.56 点へと有意に高くなった。剣道非専門者の実施した授業の場合も、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.69 ± 0.61 点であったのに対し、授業後では 3.23 ± 0.70 点へと有意に高くなった。すなわち、学習者の技能評価「相手が前に出ようとするところを打突できる」の得点は二つの授業ともに授業前後で高くなったという結果であった。

3.1.4 「お互いの攻め合いから出頭面を打つことができる」

分散分析の結果、測定時期の主効果は有意であった ($F_{(1,25)}=58.88$, $p<.01$)。剣道専門者の実施した授業は、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.36 ± 0.61 点であったのに対し、授業後では 3.29 ± 0.59 点へと有意に高くなった。剣道非専門者の実施した授業の場合も、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.31 ± 0.82 点であったのに対し、授業後では 2.85 ± 0.66 点へと有意に高くなった。すなわち、学習者の技能評価「お互いの攻め合いから出頭面を打つことができる」の得点は二つの授業ともに授業前後で高くなったという結果であった。

3.1.5 「一拍子のタイミングで踏み込みを使って打突することができる」

分散分析の結果、測定時期の主効果は有意であった ($F_{(1,25)}=10.02$, $p<.01$)。剣道専門者の実施した授業は、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.64 ± 0.47 点であったのに対し、授業後では 3.14 ± 0.52 点へと有意に高くなった。剣道非専門者の実施した授業の場合も、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.53 ± 0.63 点であったのに対し、授業後では 2.69 ± 0.61 点へと有意に高くなった。すなわち、学習者の技能評価「一拍子のタイミングで踏み込みを使って打突することができる」の得点は二つの授業ともに授業前後で高くなったという結果であった。

3.1.6 「積極的に前に出て打突しようとしている」

分散分析の結果、測定時期の主効果は有意であった ($F_{(1,25)}=76.15$, $p<.01$)。剣道専門者の実施した授業は、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.36 ± 0.48 点であったのに対し、授業後では 3.00 ± 0.53 点へと有意に高くなった。剣道非専門者の実施した授業の場合も、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.08 ± 0.47 点であったのに対し、授業後では 2.92 ± 0.62 点へと有意に高くなった。すなわち、学習者の技能評価「積極的に前に出て打突しようとしている」の得点は二つの授業ともに授業前後で高くなったという結果であった。

3.1.7 「稽古の際に相手とのかけひきから打つ機会をとらえて打とうとしている(面以外の技)」

分散分析の結果、測定時期の主効果は有意であった ($F_{(1,25)}=67.13$, $p<.01$)。剣道専門者の実施した授業は、技能評価の得点の平均値が授業前では 2.07 ± 0.469 点であったのに対し、授業後では 3.00 ± 0.53 点へと有意に高くなった。剣道非専門者の実施した授業の場合も、技能評価の得点の平均値が授業前では 1.91 ± 0.72 点であったのに対し、授業後では 2.69 ± 0.61 点へと有意に高くなった。すなわち、学習者の技能評価「稽古の際に相手とのかけひきから打つ機会をとらえて打とうとしている」の得点は二つの授業ともに授業前後で高くなったという結果であった。

表3 学習者における授業前後の技能評価得点

評価項目	授業者	授業前	授業後
技能評価の合計得点	剣道専門者	14.9±2.39	19.0±2.39
	剣道非専門者	13.9±3.12	17.3±3.36
腕のみではなく足と腰を中心に移動ができる	剣道専門者	2.71±0.59	3.36±0.48
	剣道非専門者	2.38±0.49	2.92±0.62
相手が前に出ようとするところを打突している	剣道専門者	2.71±0.70	3.21±0.56
	剣道非専門者	2.69±0.61	3.23±0.70
お互いの攻め合いから出頭面を打つことができる	剣道専門者	2.36±0.61	3.29±0.59
	剣道非専門者	2.31±0.82	2.85±0.66
一拍子のタイミングで踏み込みを使って打突することができる	剣道専門者	2.64±0.47	3.14±0.52
	剣道非専門者	2.53±0.63	2.69±0.61
積極的に前に出て打突しようとしている	剣道専門者	2.36±0.48	3.00±0.53
	剣道非専門者	2.08±0.47	2.92±0.62
試合の際に相手とのかけひきから打つ機会をとらえて打とうとしている(面以外の技)	剣道専門者	2.07±0.46	3.00±0.53
	剣道非専門者	1.92±0.72	2.69±0.61

Mean ± SD

4 考察

中学校体育における剣道の授業では、剣道の基本的技術の素振りや打突部位（面、小手、胴）に関わる攻撃技の練習には時間をかけて取り組んできたものの、その技を用いた戦術的な取り組みやどのタイミングでどのような技を出せば良いのかなど、「打突の機会」に関する伝統的な「教え」を考慮した体系的・段階的な指導方法が実践されてこなかった。そのため、本研究では、剣道の専門的な経験がない体育教諭においても教材として用いることが可能な指導内容を試案し、それを用いた授業実践を行った。本研究の授業実践は、授業者として、剣道を専門的に経験した中学校体育教諭（剣道専門者）と剣道を専門的に経験したことがない中学校体育教諭（剣道非専門者）の二つの場合に依頼して実施した。学習者は、剣道未経験であった中学1年生の場合を比較した。

ビデオに録画された授業前後の「打突の機会」に関する打突動作の記録について技能評価基準を用いて「打突の機会」学習のできばえを評価・比較したところ、二つの授業間における技能評価の得点に差が認められなかった。また、それぞれの授業ともに、授業後の技能評価の得点が高くなるという結果であった。このことは、本研究の授業実践では、剣道非専門者の教諭が実践した授業においても、剣道専門者の場合と同等に、学習者の技能が向上したことを示している。すなわち、本研究で行った指導内容は、授業者の剣道専門性の有無に関わらず、打突の機会の指導方法として扱うことが可能であり、学習者の技能が向上する内容であったといえよう。

このような中で特に顕著に向上が認められたのは、授業実践の主たるねらいであった「相手が前に出ようとするところを打突できる」のタイミング調節に関わる評価項目であった。本研究の授業では授業者の剣道専門の有無にかかわらず技能評価の得点に差が認められず、両授業とも「おおむねできている」以上のできばえであった（剣道専門者の実施した授業：3.21±0.56、剣道非専門者の実施した授業：3.23±0.70）。このとき、学習者の授業後の自由記述では「カウント練習：竹刀を使って1, 2, 3, 4のリズムで打つ」などの指導内容に対して好意的な記述が多かったことから、具体的な手立てとして「カウント練習」を行ったことが学習者の打突のタイミング（：相手が前に出ようとするところを打突できる）をつかむための学習意欲を高める要因になったと考えられる。一方、試合練習の際には、「カウント練習に意識しすぎて、試合の場面では相手とのかけひきがつかめなくなった」といった感想もみられたことから、「カウント練習」は「打突の機会」を理解させるための導入として位置づけておくことが必要かもしれない。また、学習の初期段階で簡易竹刀を用いたことにより、相手との間合い（距離）を近くした位置から打突を行わせた配慮も有効であったと考える。今後は、「カウント練習」に際しては太鼓などの合図を入れてカウントを同調させることにより、学習者がさらにタイミングを取りやすくさせる工夫も取り入れたい。

本授業の「カウント練習」は「簡易竹刀」を用いて実施した。授業の前半で簡易竹刀を使ったことに対して、感想文では「痛さが無いから安心して打突を行うことができた」や「ゲーム感覚で手軽に取り組めるた」などの記述がみられた。また、授業中盤の出頭の競争でも積極的に攻防を行う様子が観察されるなど、導入段階での手立てとして「簡易竹刀」を用いることの効果が窺われた。一方、竹刀を用いた試合練習になると、剣道における竹刀の適切な振り方とは異なった「叩き合い」に固執してしまう場合もあったため、試合練習へ連絡していくための段階的な指導内容をさらに検討する必要がある。

5 おわりに

本研究では、中学校体育授業における剣道学習の「打突の機会」の指導法に焦点をあてた授業実践を行い、その指導内容の効果について検討を行った。指導内容は、「打突の機会」の学習にゲーム形式で取り組める「カウント練習」に着目し、剣道で用いる実際の竹刀よりも軽くて扱いやすい「簡易竹刀」を用いた段階的な指導内容を構成した。授業実践の授業者は、剣道を専門的に経験した中学校体育教諭と剣道を専門的に経験したことがない中学校体育教諭に依頼して実施した。学習者は、剣道未経験であった中学1年生の場合を比較した。その結果、ビデオに録画された授業前後の打突の動作の記録から「打突の機会」に関するできばえを評価・比較したところ、二つの授業間における技能評価の得点に差が認められなかった。また、それぞれの授業ともに、授業後の技能評価の得点が高くなるという結果であった。したがって、本研究の指導内容は、授業者の剣道経験の有無に関わらず打突の機会の指導方法として用いることが可能であり、学習者の技能が向上する内容であったと考えられた。

引用文献

- (1) 文部科学省：「中学校学習指導要領（平成20年9月）解説－保健体育編」，東山書房，p.3，2008.
- (2) 直原 幹：「体育科教育における今後の武道指導に関する考察」，上越教育大学研究紀要28巻，pp.236-240，2009.
- (3) 小田野 倫也：「中学校体育授業における剣道の踏み込み足指導に関する実践的研究」，上越教育大学大学院（保健体育）修士論文，2010.
- (4) 柴田 一浩：「ダンスと武道の直面する課題をどう解決するか」，体育科教育6月号 p.42，2008.
- (5) (財)全日本剣道連盟：「中学校剣道の現状」，月刊 武道，p.60，2011年9月
- (6) 浅見 裕：「剣道好きをつくる指導 上」，剣道日本，2011.
- (7) 巽 申直：「新しい剣道の授業づくり」，大修館書店，2004.
- (8) 高倉 聖司：「面白!びっくり!新発想!! 剣道レッスン」，スキージャーナル，pp.111-113，2008.

A Practical Study for Learning Opportunities for Striking in Kendo in a Junior High School Physical Education Class

Masaaki NAKAGAWA *, Shigeki IKEGAWA **, Kan JIKIHARA **

ABSTRACT

This study introduced and applied a new teaching method focusing on the characteristics of opportunities for striking to a practice lesson for 7th grade. We drafted the Count Practice Method, which allows students to quickly learn and understand the assigned task, as an educational tool for opportunities for striking. The extent of each learner's progress was evaluated from videos recorded before and after the class in accordance with the skill evaluation criteria established in this study. The effects of the class led by a physical education teacher experienced in Kendo and by a physical education teacher with no Kendo experience were compared. The classes were found to improve the learner's skills regardless of the teacher's Kendo experience. This suggests that the Count Practice Method is an effective teaching method for learning opportunities for striking.

* Matsushiro Municipal Matsushiro Junior High School, Nagano ** Music, Fine Arts and Physical Education